様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５６００２１

研究課題名（和文）中国の学校教育における食育カリキュラム開発の支援

研究課題名（英文）School Curriculum Development for Food and Nutrition Education in China

研究代表者
菊地　るみ子（KIKUCHI, Rumiko）

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：４０１２７９２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：1.中国の子どもの食生活の現状として、朝食欠食や間食の消費量増加、偏食の課題などを明らかにした。
2.幼稚園「健康習慣」の食育内容を分析し、衛生や食事作法などがあることを明らかにした。小学校「品徳と生活」「品徳と社会」の食育内容を分析した。1年生で食品の4群分けの栄養学習など食育課題を扱っていた。2年生では食文化、3年生では自分の役割、4年生では消費生活がみられたが、6年生では世界の食文化だけであり、高学年になるほど食育内容は減少することを明らかにした。
3. 天津市内の小学2年生1クラスを対象とした食育実践を観察分析した。

研究成果の概要（英文）：　Increasing eating frequency at fast food restaurants leads to excess dietary-fat intake among Chinese children. We analyzed four “Healthy Habits” books to find out what kind of Food and Nutrition Education contents are included in the books. We analyzed “Moral and Living” and “Moral and Society” from the perspective of Food and Nutrition Education. The textbook of “Moral and Living” for first grader shows the importance of well-balanced food intake and sanitary. The textbook of “Moral and Society” for fourth grader shows recommendations for smart shopping and Sashimi is introduced as Japanese food culture in for sixth grader. Both “Moral and Living” and “Moral and Society” textbooks contain quite a few descriptions related to Food and Nutrition Education.
At last, we observed a second grade class at a elementary school in Tianjin. It is significant to start food and nutrition education from the earlier grade in elementary school in China.

研究分野：家庭科教育

キーワード：中国の食育　健康習慣　品徳と生活　品徳と社会　幼稚園　小学校　国際研究者交流

１．研究開始当初の背景

日本は小学5年生から高等学校まで家庭科教育を実施しているが、中国の学校教育に家庭科という教科はない。そこで、中国と日本の小学6年生を対象に衣生活に関する実態を比較した結果、家庭内で実践されていた手洗い洗濯・干す・片付けの項目は中国の方ができると回答した児童が多かったが、手縫い・ミシン縫い・アイロンかけなど家庭科学習で取り上げる項目は、日本の方ができると答えた児童が多かった[1)]。2002年の調査時点で衣生活だけを取り上げたのは、中日の比較検討がしやすかったからである。

その後も、中国は著しい経済成長率を示しており、食生活はとても豊かになってきている。食料品消費金額は増加し、間食の消費率が増加し、近年子どもの健康が問題となっている[2)]。子どもの教育には学校・家庭ともに熱心に取り組んでいるが、家庭科教育がないため、食生活指導は家庭中心とならざるを得ないが、一人っ子家庭が広くいきわたっており、受験のための知識習得中心の教育になりがちである。2007 年、中国政府は「生活の質」を重視する「調和社会」へ転換する方針を打ち出し、生活教育に取り組み始めている。そこで、日本の食育実践の成果を活かし、中国の国情にあった学校教育での食育カリキュラム開発の試行に取り組んだ。

２．研究の目的

研究の目的は、中国の学校教育における食育カリキュラム開発の支援をすることであるが、教育制度や学校の施設・設備状況、教育観、食生活に対する考え方などが異なる中国での実態を踏まえて、具体的な目的としては、次の4点に絞り込んだ。

(1)　中国の子どもをめぐる食生活の現状と課題を明らかにすること

(2)　中国の幼稚園用副読本「健康習慣」で取り上げられている食育内容を検討すること

(3)　中国の小学校「品徳と生活」「品徳と社会」の教科書で取り上げられている食育内容を検討すること

(4)　天津市内の小学校で実践された食育内容を検討すること

３．研究の方法

(1)　まず、中国の子どもの食生活の現状を明らかにするために、中国医学科学院の調査、中国の食と健康に関する調査データなどを収集し、日本の研究成果を踏まえて検討した。

(2)　次に、食育の初歩として幼稚園教育に着目し、副読本「健康習慣」を取り上げて食育内容がどのように扱われているのかを分析検討した。

(3)　さらに、小学校での食育の現状を把握するために、日本の家庭科教育と似た内容がみられる「品徳と生活」「品徳と社会」を取り上げて、食育関連内容がどのように扱われているのかを分析検討した。

(4)　最後に、天津市内の小学2年生1クラスを対象に実施された授業実践を観察分析した。実践は2014年3月12日に実施され、題材名は「朝食を食べると良いこと」であった。

４．研究成果

(1)　中国の子どもたちの食生活の現状として、83%は朝食を毎日食べているが、約半数の子どもの朝食は主食・主菜・副菜が揃っていないとの評価があること、牛乳の消費量の減少と清涼飲料の消費量の増加などの問題があった。脂肪からのエネルギー摂取率の増加、間食頻度の増加、高カロリー・高脂肪の洋風ファーストフード嗜好の増加などとともに、睡眠不足の問題も指摘されていた。

日本の子どもの健康、生活リズムと食生活の関連に関する研究成果から、①生体リズムとの関係で朝食が大切であり、「早寝早起き朝ごはん」国民運動を推進していること、②偏食は固定されたものではなく、無理強いせずに調理法の工夫や好奇心を高め、嗜好の幅を広げる食育を工夫することが重要である、③スナック菓子などを控え間食からのリン摂取を控えることが望ましいなどが明らかにされている。

食習慣形成の基盤として幼児期の食育における目標は、①楽しく食べること、②食事マナーの習得、③食物への関心の向上、④栄養バランスの良い食事摂取を掲げた。学童期では、①食品知識の習得、②食べ物と関わることができることである。中・高校生期では①食物選択の経験を増やし、②体に必要な食品や食べ方を知り、③バランスの良い食習慣を身につけることを掲げた。これらを子どもたちに指導し、身につけさせていくためには、学校教育で系統的・継続的な食育に取り組んでいく必要がある。

(2)　中国の幼稚園における幼児の「健康」についての指針は、「心身の状態、行動の発達、生活習慣および生活能力」の３つの観点で構成されている。幼児が良好な食習慣を身につけるように、年齢別に目標を示した。目標では、①偏食を避け、②生鮮食品を好み、③炭酸飲料よりも水を積極的に飲み、④よく噛んでゆっくり食事をすることなどをあげている。

幼稚園用副読本「健康習慣」では、年少児で、①ていねいな手洗いの方法を写真で提示、②野菜と果物の名前・見分け方、③上手にスプーンを使って食べること、④食物の衛生や安全内容、⑤食後に口を拭く作法が取り上げられていた。年中児では①歯磨き習慣について取り上げていた。年長児では①4 人の幼児

の食習慣の比較、②2 人の幼児の偏食と体格の比較、イラストによって③食物と胃の関係、④食物の消化と吸収過程が扱われていた。

図 1　「健康習慣」（小班・下）現代出版社、P. 8、2011 年

図 1 は、衛生と安全に関して「食べられるかどうか」で「ハエがとまった食品、発芽したジャガイモ、賞味期限が過ぎた食品、変質して膨らんだビスケット」を例示して問いかけている。日本の食育と比較すると、中国では衛生面をていねいに取り上げている。食の根幹であるが、日本の場合は「幼児に提供される食品は安全」という前提があるため取り上げないのではないかと考えられる。

食品への関心の高め方、生活習慣の指導は日中共通の課題として扱われている。日本では共食が意識的に取り上げられているのに対して、中国ではこの点を意識しているようには思えなかった。今後、食を通じたコミュニケーションの役割を重視する必要があるのではないかと考えられた。

(3)　小学校「品徳と生活」「品徳と社会」の教科書における食育関連内容を分析した。

1 年生では、①「乳・乳製品と大豆、野菜・果物、卵・魚・肉類、穀物・いも類」の 4 群で食品を分けていた（図 2）。これは、日本の 4 群「乳・乳製品と卵、魚介・肉と豆・豆製品、野菜・いも類・果物、穀類・砂糖・油脂」とは異なる分類であった。

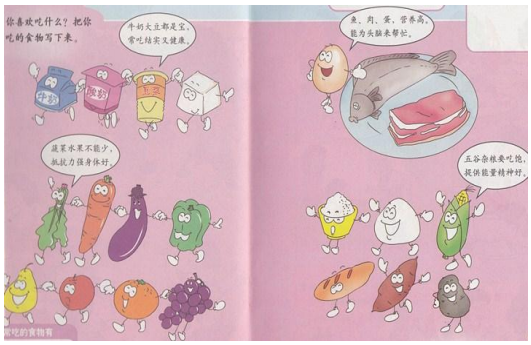

図 2　「品徳と生活」人民教育出版社一年生（上）、P. 39、2012 年

②野菜の役割を理解させ、③朝食欠食や食べ過ぎ、菓子や清涼飲料の過摂取を控えて、良い食習慣を身につけさせようとしていた。④正月行事と食事の関連から会食のマナーを取り上げており、⑤女の節句(3 月 8 日)では、母の料理への感謝と子どもに食事づくりへの関心を高める内容が取り上げられていた。さらに、⑥虫歯予防、⑦目の健康、⑧夏季の注意点をあげて衛生面も扱っていた。

2 年生では、①収穫の手伝い、②パインナップルやマンゴーのイラストで郷土の物産を紹介している。さらに、③中秋節と重陽節で、中秋の名月をめでつつ月餅を食べながら一家団欒する伝統的な食文化をイラストで紹介するとともに、④環境美化を取り上げ、果物の皮や飲料缶をどこに捨てたらよいかを問いかけて、ゴミ処理問題も扱っていた。

3 年生では、自分の役割や行動の仕方を取り上げていた。①飲食の安全では手洗い、②食品の表示や賞味期限への注意喚起、買い食いの注意を取り上げている。③食事づくりの担い手や野菜などの生産者に対する労働への気づきや思いやりを求めている。図 3 は「自分のはじめてしたこと」として、男児が料理をして「いいにおいだなあ！」と言っている。

図 3　「品徳と社会」人民教育出版社三年生（上）、P. 28、2012 年

4 年生では、①生命の尊さで「良い生活習慣をつくる」こと、②衛生面を取り上げて「生活の中の悪い習慣を探そう」と呼びかけ、③安全性では「手を切らないように、果物の皮をむく」方法を考えさせ、④消費生活では冷蔵庫が買い過ぎで膨らんでいるイラストを提示し消費方法を考えさせている。⑤食品の品質表示も取り上げていた。さらに、⑥中国各地域の郷土料理を紹介している。

図 4　「品徳と社会」　五年生（上）、人民教育出版社、P. 82、2012 年

図 4 は、①5 年生「民族の風俗と礼節」での回族の食文化である「八宝茶」の紹介である。茶の原材料と茶具の蓋の役割が解説されている。②中国の食文化と西欧の食文化を比較した説明があり、それぞれの長所・短所を考えさせていた。

6 年生では、日本の木造家屋と着物とともに、①日本の食文化として刺身を紹介しているだけである。6 年生では環境問題、首脳会議、経済成長など世界に視野が広がっているが、自分の食生活を営む方向には向かっていないことが明らかになった。この点は、日本の家庭科教育との大きな相違点であった。

分析を行った「品徳と生活」「品徳と社会」の教科書は食育内容をかなり取り上げていたが、食生活や食文化に関する知識理解が中心内容であった。さらに、高学年になると食育内容は極端に減少していた。

日本の小学 5,6 年生の家庭科教科書では、調理器具名や調理計画、調理方法、調理理論、食事計画を取り上げて、食生活の自立に向け内容を展開するのに対して、そのような内容は見られなかった。家庭科学習には生活スキルの習得を伴い、実習室が不可欠である。しかし、中国の小学校に家庭科室はなくスキル学習が困難であるため、知識習得が中心とならざるを得ない。そうでありながらも、中国において小学校段階での食育の必要性が認識されるようになってきたことを示しており、これからの発展を期待したい。

(4)　食育授業実践の観察は、天津師範大学の李　素敏院長の協力と支援によって実現した。2014 年 3 月 12 日、天津市内の小学校 2 年生 1 クラスの食育授業 1 時間（40 分）である筆者と共同研究者である柴　英里・劉智萍、天津市教育局担当者が参観した。普通教室であるが、黒板の半分は電子黒板であった。題材名は「朝食を食べると良いこと」であり、電子黒板には「食は人間の中心」と提示されていた（図 5）。

図 5　授業開始時のクラス

授業内容は、次の 11 項目であった。

①今朝の朝食調べ、②2 人の事例比較から朝食欠食が不調の原因であることの説明、③朝食調べの宿題の話し合い（グループ）、④朝食についての栄養専門家の話というデジタルコンテンツ（動画）視聴、④食品と 4 群学習、⑤献立事例の問題探し、⑥学習の振り返り、⑦栄養のバランスが良い朝食の組み合わせを考えて紙皿型シートに食品カードを貼る活動（グループ）、⑧グループ発表（図 6）、⑨教師によるグループ活動のまとめ、⑩食文化の伝承に関するデジタルコンテンツ視聴、⑪家族と一緒に朝食を準備するという宿題の説明で終了した。40 分授業の割に学習項目は多かったが、授業内容は中国側に任せ、注文や要望を出していない。

図 6　グループ発表の様子

授業時に、「品徳と生活」の教科書は使用されなかった。この小学校では、本研究の教科書分析で使用した人民教育出版社とは別の北京師範大学出版社の教科書を使用していたが、食育内容はほとんど見られず、自然科学的な内容を重視したものであった。

授業には、日本の家庭科では小学 5, 6 年生で学ぶ内容が含まれていたので、小学 2 年生にとっては難しかったのではないかと考えられる。理想的な朝食は、多様な食品カード（図 7）が準備されていたにもかかわらず、結果的には教師が例示したものとほぼ同様の食品が選択されていた（図 8）。

食品カードは、未調理の食品と調理済み食品が混在しており、1 房のバナナは量が多すぎ、ピーマンや生肉は、そのままでは食べられないものであったので、児童は選択しなかった可能性がある。

図 7　食品カード

児童は授業中、終始真剣に学習しており、食品の栄養知識はある程度あるように思わ

れたが、理想的な朝食を考える活動には活かせなかったようであった。デジタルコンテンツは充実しており有効であったと考えられるが、食品カードは一人でそのまま食べられる食品を選ぶなど、さらなる工夫が必要であるように思われた。

図８　グループ活動後の様子

学習活動で２度のグループ活動が取り入れられたのは、「品徳と生活」に「グル―プで協力して活動する」単元があるためと考えられた。学習形態が一斉スタイルだけでなく、仲間とともに学習するグループ活動の機会があったことは、家庭科的学習として有効であると考えられる。互いの生活事情や考え方を交流することで、互いの理解を深めることが期待できるからである。

本授業実践により、児童の食生活の知識・技能・態度・行動にどのような効果や影響があったかについて推測の域を超えることはないが、中国で食育への取り組みが開始されようとしている事実が明らかになったといえるであろう。まずは、小学校１，２年生の「品徳と生活」、３年生から６年生までの「品徳と社会」で食育をしっかり位置づけて指導してほしい。「品徳と生活」「品徳と社会」は各学年週２時間ずつある教科なので、学習を積み重ねることで教育効果はあらわれると期待できる。中国で、すぐに実習室が整備されるかどうかは不明であるが、スキル学習を含めることを視野に入れながら、今後もますます食育の取り組みが順調に発展することを期待したい。

それと同時に、日本の家庭科教育は食育面でとらえると、知識だけでなくスキルの習得、さらには食生活の自立をめざして、小学校から高等学校まで男女ともに実践的・体験的に学んでいる。すでに、教育実践の蓄積も豊富にある。今後の課題となっているワーク・ライフ・バランスのとれた社会や持続可能な社会の実現のために、生活力の育成は不可欠となるであろう。生活課題を地域と連携して多面的に学ぶために、家庭科教育の充実と発展がより求められてこよう。

＜引用文献＞

① 菊地るみ子・刘　智萍、中日両国小学生の衣生活教育の現状と課題－天津市と高知市における事例調査を通じて－、日本家政学会誌、査読有、Vol.56 No.1、2005年、31-39 頁

② 中国儿童膳食营养健康调查报告》发布 孩子挑食最普遍，来源：人民网-健康卫生频道
（http://health.people.com.cn/n/2013/0530/c14739-21676964.html 2013.5.30）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４件）

① 劉　智萍・柴　英里・菊地　るみ子、中国天津市内の小学校における食育実践の検討、高知大学教育学部研究報告、査読無、75 号、2015 年、115-121 頁
http://hdl.handle.net/10126/5515

② 劉　智萍・柴　英里・菊地　るみ子、中国の学校教育における食育カリキュラム開発（3）－中国の小学校「品徳と生活」「品徳と社会」における食育内容の分析－、高知大学教育学部研究報告、査読無、74 号、2014 年、1-12 頁
http://hdl.handle.net/10126/5314

③ 劉　智萍・柴　英里・菊地　るみ子、中国の学校教育における食育カリキュラム開発(2)－中国の幼稚園用『健康習慣』における食育内容の分析－、高知大学学術研究報告、査読無、 62 巻、2013 年、109-116 頁
http://hdl.handle.net/10126/5277

④ 劉　智萍・柴　英里・菊地　るみ子、中国の学校教育における食育カリキュラム開発(1)－中国の子どもをめぐる食生活の現状と課題－、高知大学学術研究報告、査読無、62 巻、 2013 年、101-107 頁
http://hdl.handle.net/10126/5276

〔その他〕

研究発表

菊地　るみ子、日本における家庭科教育の意義と課題－中国の学校教育における食

育の取り組みを通じてー、第 58 回高知県家庭科教育連合会研究大会、2014 年 12 月 6 日、高知県立大学（高知県）

６．研究組織

(1)研究代表者

菊地　るみ子（KIKUCHI Rumiko）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：４０１２７９２３

(2)研究協力者

柴　英里（SHIBA Eri）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・講師
研究者番号：　７０６１１１１９

劉　智萍（LIU Zhiping）
中国・天津師範大学教育科学院・講師

李　素敏（LI Sumin）
中国・天津師範大学教育科学院・院長